

私の「現代語」教科書

〔言語事項〕に留意した「表現」授業

●群馬県立沼田女子高等学校教諭

野村耕一郎

(のむら・こういちろう)

●「現代語」から受け継がれるべきもの

「現代語」は、この三月まで細々とながらも全国の高等学校で開設されていた。「まだそんな科目が残っていたのか」と感じる先生方がほとんどであろう。実際、「現代語」の学校現場での開設状況は、当初から惨憺たるものであった(＊1)。しかし、「現代語」の目指したものの、指導内容には、注目すべきものがあつた。

第一に、「現代語」は、革新の精神に満ちあふれていた。科目新設の構想段階から、「現代語」にはさまざま

な困難があつたとき(＊2)が、最終的に「「国語I」の〔言語事項〕を補充、深化、発展させる」(平成元年版学習指導要領)という明確な性格付けがなされた。〔言語事項〕の内容は、従来、教科書においてはコラムのように扱われがちであつた。また、授業においても、ややもすると、常用漢字の読み書き、文法といった指導内容に偏りがちな傾向があつたのではなからうか。「現代語」からは、そんな〔言語事項〕の扱われ方の状況を、正面から変えてゆこうとする意気込みが感じられた。そして、学習指導要領をうけて教科書が編集される段階でも、その精神はしっかりと受け止められた(＊3)。

第二に、「現代語」は、世界の中の日本語という視点に貫かれていた。平成元年版学習指導要領が練り上げられてゆく時期は、日本が好景気にわいた時期に重なる。経済的繁栄を背景に、「日本語はますます世界的に使われるようになるに違いない」といった意見が多く語られたところが、今日あるように景気が低迷するや、うってかわつて「小学校から英語教育を」という話題が中心となる。世間的な〈気分〉としてはそれでもいいのかもしれないが、国語教育は、〈気分〉をくみとりつつも、〈気分〉に左右されてふらついてはならないであろう。むしろ、こ

れからこそ、世界の言語状況のなかで、冷静かつ客観的に日本語を考えてゆく必要があるのではないか。幸いにして、現行学習指導要領でも、特に「国語表現Ⅰ・Ⅱ」にその視点は受け継がれている。

●私の「現代語」教科書

筆者は、前任校の群馬県立新田暁高等学校で「現代語」を担当した。授業では、右で述べた「現代語」の精神・視点を大切にして、年間の指導を展開した。前任校は総合学科高校であり、生徒一人ひとりが自分の進路にあった科目を自ら選び、時間割を作成する。平成十六年度にこの授業を履修した生徒は、三年次生徒十四名（男子四名、女子十名）であった。希望進路は、進学・就職でちょうど半々である。（選択授業であるため、年によって受講生徒の人数・希望進路等は一定ではなかった。）時間割編成の都合から、「現代語」（二単位）の授業は週に一回、二時限続きで行った。

年間の授業展開を、教科書の目次風にまとめて下に掲げる。「Ⅰ」をつけた教材は、使用した教科書『高等学校 現代語』（角川書店）に収録されている。）

1	現代語入門
	・ 日本語の表記
	・ 日本語で用いる符号と句読点
	・ 日本語の音節
2	和語・漢語・外来語
	・ 「外来語」（多田 道太郎）
	・ 漢字の音
	・ 漢語の組み立て
3	言葉と社会
	・ 「よろしく」（森本 哲郎）
	・ 苦情 言うとき言われるとき
	・ 中学生に対して敬語を使うとき
4	話し言葉
	・ 「話し言葉の特徴」（畠 弘巳）
	・ 方言発見
	・ 「標準語の成り立ち」（上村 幸雄）
5	世界の中の日本語
	・ 「翻訳は可能か」（千野 栄一）
	・ 「日本語が国際語になるには」（アントニオ・アルフォンソ）

●授業の実際

筆者が特に工夫をこらしたのは、3・4章である。紙幅の関係から、ここでは、「苦情」を取り上げた授業について説明したい。

われわれの言語生活をふりかえってみると、言葉は、必ずしも和やかに使われていない。しかし、常に和やかな関係が結べる言葉が求められているのも事実であろう。だからこそ、「国語表現」で手紙の書き方、電話のかけ方、話し合いのしかたが取り上げられるのではなからうか。

「苦情」の授業は、言葉をみずえ、その先へもう一歩踏みこんだ試みである。

授業は二時限連続一回の完結とした。新聞記事^{(*)4}をもとに、①記事で紹介されている苦情の受け方、苦情の言い方を整理し、それをもとに、②アルバイトをしているときにいやな苦情の言われ方はどんなものか、自分ならどんなふうに苦情を言うかを考えさせた。現代の高校生が「苦情」に身近な位置にいることは予想以上であった。社会全体を見回すと、捨てぜりふ、はぐらかし、意図的な意味不明発言等、不愉快な言葉がはびこっている。

授業を通して、不愉快な気持ちを和やかに相手に伝える術を、われわれはもつと考えていく必要があることを再認識させられた。

今後、筆者は「言語事項」について「国語総合」「国語表現Ⅰ・Ⅱ」の授業等ですっかりと位置づけてゆけたらと考えている。ご意見をいただければ幸いである。

〔参考文献〕

*1 「グラフで見る学校現場の「現代語」」（日本語学）一九九七・五月号、明治書院

*2 「旗手的役割を担った「現代語」の命運」（大平浩哉『国語教育改革論』一九九七、愛育社）

*3 たとえば、野元菊雄ほか編『現代語』教科書（一九九四、三省堂）。

*4 「朝日新聞」二〇〇二・十一・二「お作法 不作法」に掲載。

本稿は、二〇〇五年一月二十九日に開催された早稲田大学国語教育学会研究会「国語教育史と実践に学ぶ会」における口頭発表の内容を、参加者からいただいた意見をふまえて改訂・縮約したものである。